

父娘二人三脚で歩んだ「宮崎モデル」構築への道

国産材を余すことなく活用し林業を元気に



中国木材株式会社
(広島県呉市)

取締役会長

堀川智子さん

乾燥材の製造に挑む

広島県の南西部に位置する呉市は、穏やかな瀬戸内海の波音の聞こえる海街だ。港湾に面して、中国木材株式会社の本社と工場がある。建物が立ち並ぶ敷地内には、切り揃えた多量の原木が山をなして整然と積み立てられている。工場直結の岸壁には大型船が接岸している。この船で、米国からはるばる運ばれてきたベイマツなのだ。

「一船満杯で、月に3回から4回運ばれてきます。帰りは空っぽで、日本の空気だけ積んで戻ります。ベイマツは、日本の木造住宅で使われる梁はりなど強度が必要となる骨組みの構造材になります」と説明してくれるのは、中国木材取締役会長の堀川智子さん(59歳)。

2024年には、日本の木造軸組住宅8・6万户分の構造材に採用され、4軒に1軒が、中国木材の構造材で建てられたことになるのだという。構造材メーカーとして国内屈指の規模を誇っている会社なのだ。

「最初はチップ製造が中心でしたが、2代目社長の父が、製材事業に転身し、会社を大きくしていった中興の祖です」と智子さん。

「大型工場を建設し船を岸壁に横付けするのは、父の英断でした。昔はロットが小さかったので、複数の港に立ち寄るため、何百万円も余計に経費がかかる。その上、原木は、一度海に降ろしタグボートで引き寄せ



て陸に揚げる。これではもったいないと、大型工場併設の自社バース建設に踏み切ったのです」

外航船を、自社の敷地内に接岸停泊させ、原木を積み降ろす専用ふ頭を設けたのだ。北米の港と呉本社の自社港だけを、直接結ぶという輸送体制である。

「当時の会社の規模からすると、驚くよう

P17: 会長室の窓辺に立つ堀川智子さん。一望のもとに横付けされた船やベイマツが見える。38000tの船に積載されたベイマツは、1本の長さが12mもある！ 壮観だ
P18: 日向工場では製材した小角材や挽き板を、およそ3カ月間、天日にあてて自然乾燥させる。天乾後、乾燥機に投入される(上) 父保幸さんと自社専用船の進水式で(左) (P18の写真提供: 中国木材株式会社)



な巨額投資だったのですが、事業を拡大していけばコスト回収が可能と長期的視野に基づいて敢行したのでしよう」

子供のころ、家においても常に計算尺を手にして数字を相手に没頭している父、保幸さんの姿が、智子さんには強く印象に残っているという。

ドライ・ビームというベイマツ乾燥材の製造に挑んだのも保幸さんだった。きっかけは、新築した自宅の床が、築後1年足らずで傾いたこと。ベイマツが未乾燥材で建築後の乾燥により梁が収縮したからと判明。

「『これはまずい』と、父は必死になって乾燥の研究を重ねて、1992年にドライ・ビームが誕生しました。今では、うちの販売実績の半分近くを占める看板商品です」

公認会計士から木材業の世界へ

ちょうどそのころ、智子さんは、東京の監

査法人で公認会計士として働き始めていた。大学卒業後「経理なら父の会社を手助けできるかもしれない」と公認会計士をめざした。念願の資格を取得して、7年半ほど勤務したが、インチャージ(監査法人の現場責任者)として夜半までの激務が続き、体調を崩してしまった。

「早く帰ってこい」という保幸さんの言葉にうながされて帰郷したのは、1999年。会社では、基幹システムを刷新するプロジェクトが立ち上がったところだった。図らずも、その作業に加わることになり、連日、深夜まで追われることになった。

その姿を黙って見ていた保幸さんが、智子さんを経営企画本部長に任命した。

会社役員として業務に携わって、初めて見えてきたことがあった。

「投資計画の作成などは、財務諸表が読める外部から入社した部長が担当していました。しかし、事業拡大に意欲的な父の周りには『今日も多くの丸太を処理するぞ。がんばろう』と檄を飛ばすたき上げの役職者たち。実は管理資料を読めない人や、投資効果計算ができない人がほとんどだったのです」

当時は、それをみんな当然のことのように受け止めていたので「まずは、この社風を変えなければいけないと思いました」と智子さん。東京での公認会計士の経験から、社員の育て方や、学ぶべき内容を考え抜いたという。



ふ頭には、船舶で事業所へ送る仮置きされた製材品(上)ヒノキの無垢ボードを張り巡らせた会議室で(中) 受験時代から愛用するボロボロの電卓と5mm×2cmのミニ付箋。智子さんは使い捨てが大嫌いです(下)

日本の林業を元気に

「役職者は昇進試験をします」と社員教育をすることに踏み切った。加えて「大卒新入社員は、簿記の資格を取る」と指令を出した。社内ではがんばって簿記の資格を取得しようという空気が次第に広がっていき、資料を読み取れる課長や係長が増え、収支を考えて会話する風潮も生まれた。

「このことをきっかけに、社風がぐっと変わりました」とは、社員の実際の感想だ。

情報システム、経営企画部、貿易部、人事総務部、常務取締役と所管を広げてきた智子さんは「父が社長、私が傍らで支えるという構図が、父にとってはよかったんだと思います」と語る。

そして、保幸さんが、智子さんを社長に決めて将来を託したのは2015年。「仕事の段取りをうまく取り組む勤がいい娘」とは、保幸さんの著書にある評価だ。

その一つが、保幸さんと共に取り組んだ、宮崎県日向市に建設した日向工場だ。戦後に植林されたスギやヒノキが、まさに伐採期を迎えている。国産材の安定的な質と量を確保して供給できる大規模な工場をと、建設に踏み切ったのだ。総敷地面積17万坪。広さも設備環境も、ただならぬ超大型工場である。

まずは、山から出るスギ材をすべて受け入れる。従来は、欲しい太さだけ木材市場で買うシステムだったが、日向工場では、未利用材から、小径木、中径木、大径木まで丸ごと原木を受け入れる。広大な敷地に並べて

丸太の検寸から製材へ。丸太は工場の機械に乗って四角くカットされていく。ログスキャナーで材の形状を読み取り、製材、角材へ。人の手に依らず大型装置による全自動で流れて加工されていく。圧巻だ。そして丸太の木の皮やおがくず、端材は一つ残らず木質バイオマス発電の燃料になる。

「この工場だけで国産材を余すところなく活用しています」

資金調達をはじめ収支計画などの資料作成に奔走した智子さん。15年6月の完成披露パーティーでは「日向工場がこれからの国産材のモデル工場になると思います。日本の林業を元気づける『宮崎モデル』の構築をめざしていきます」と社長として挨拶に立った。

もう一つ、智子さんが力を入れて旗振りをした事業が、DIY用材の開発。代表的なカフェ板は、国産スギをDIY用にプレカットした無垢材で、ホームセンターなどで手軽に購入できるヒット商品となった。

「現代のニーズに対応した商品です」

カフェ板には、柱材を取るには伐採時期を過ぎて育ち過ぎた植林木を使用しているそう。太い木を伐採して需要に回し、植え替えることで脱炭素を進めて地球環境をよくすることにもつながっていく。

「なにより木材を持つ本来の力を信じていますし、製材メーカーとして日本の山と環境に貢献したいと思います」

(片柳草生／文 衛藤克樹／撮影)